

コミュニケーション能力の素地を育む外国語活動

～必然性のあるコミュニケーション活動を通して～

辻 伸幸

本論文は、必然性のあるコミュニケーション活動を通して外国語活動におけるコミュニケーション能力の素地を子どもたちが育むためのアプローチを確立することが目的である。必然性を高める工夫として保護者ボランティアの支援を計画的に取り入れた。保護者ボランティアを有効に活用すれば指導者が一人の時と比べ、必然性を高めたコミュニケーションを取る時間がその人数分増えることにつながる。また、子どもたちの質の高い学びを成立させるための焦点化をメタ認知的手法で取り入れた。このことにより子どもたち一人ひとりの主体的な外国語活動の学びが成立し、コミュニケーション能力の素地を育むことができると考えられる。

キーワード：外国語活動、コミュニケーション能力の素地、必然性を高めたコミュニケーション活動、保護者ボランティアの活用、質の高い学びを支える焦点化

1. はじめに

平成 23 年度から新学習指導要領が完全実施され、外国語活動（原則は英語活動）が、小学校高学年（5、6 年生）で年間 35 コマ必修となった。目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ことである。全国の公立小学校では、その目標を達成するための努力を積み重ねている。まさに、外国語教育分野で小学校教育の歴史的転換期とも言える時期である。

外国語活動の目標からも分かるように最終的なゴールはコミュニケーション能力の素地を養うことである。したがって英語スキル（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）習得に重点を置くような指導をしてはいけない。ところが、指導者である小学校教員は、英語スキルの習得を目標とした教育しか受けていない。ややもすると、指導者自身の教育経験からスキル習得型の外国語活動を強め英語嫌いの子どもの増産する危険性が大きい。

外国語活動を好意的に捉えていない子どもたちでは、授業で嫌いと感じる場面として英語スキル面を挙げる者が半数占めることが示された（辻、2011）。文科省の 2009 年の調査（外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方に関する実践研究授業に係わる実践研究校児童向け意識調査）において 5 年生の 7.8%、6 年生の 10.3%の者が外国語活動の授業を嫌いと感じている状況を考慮すれば、これ以上の外国語活動嫌い（辻、2008）を増やすわけにはいかない。

コミュニケーション能力の素地を養うためには、コ

ミュニケーション活動を通じた経験的な学びが必要である。もちろん英語スキル面で十分に慣れ親しむ活動は欠かせないが、あくまでもコミュニケーション能力の素地作りと言う指針がぶれてはいけないのである。

さらに、小学校高学年という発達段階を考えれば、コミュニケーション活動の質が重要になってくる。この質を高めるために必然性をもたせたコミュニケーション活動に主軸を置いたのが本研究の特徴である。

2. 必然性のあるコミュニケーション活動

2. 1. コミュニケーション能力と活動

ここでは、コミュニケーション能力とコミュニケーション活動についての定義を確認する。

白畑、富田、村野井、若林（1999）は、コミュニケーション能力とは、言語を正確に理解し、実際の状況の中で適切に使用する能力とする定義を挙げている。また、コミュニケーション能力の下位分類として、文法的能力（統語的能力や発音などの言語に直接関係する能力）、談話的能力（前後関係や場面などの状況を正確に把握し的確に伝達できる能力）、社会言語学的能力（社会的規則や約束ごとを把握した上で明確に伝え合うことができる能力）、方略的能力（聞き返しなどのコミュニケーションを円滑に進めるための能力）の 4 つも紹介している。

コミュニケーション活動とは、白畑、富田、村野井、若林（1999）によると上記のコミュニケーション能力を発達させることを目的として目標言語（外国語活動では英語）を使用して行う活動としている。現実のコミュニケーションと同じ、もしくはそれに近い言語使用の場をつくり出しコミュニケーション能力を伸展さ

せることとしている。

以上、コミュニケーション能力とコミュニケーション活動についての定義を確認したが、外国語活動では、「素地」を育むという視点が加わっている。これは、上述した英語スキルをはじめとするコミュニケーション能力を習得する上での土台と考えることができよう。具体的には、様々な経験から、さらに意欲的にコミュニケーションをとろうとする態度面であったり、他国の文化や自国の文化に興味をもったり、コミュニケーション活動で必要とする英語の表現に慣れ親しもうとする面であったりする。

2. 2. 必然性のあるコミュニケーション活動

コミュニケーション活動は、2-1 で定義を確認したように実際のコミュニケーションもしくは実際の場面に擬似的な活動を意味するが、子どもたちにとってどれだけ活動を行うことの必然性が存在するのかが一つのポイントとなる。

必然性を高めるためには、いくつかの原則が外国語教育で指摘されている。一つは、情報のギャップが存在するときにコミュニケーションの必然性が生まれるという原理（白畑、富田、村野井、若林、1999）である。活動に様々なギャップ（インフォメーションギャップやイメージギャップなど）を意図的に創り出し、そのギャップを埋めるタスクを設定することで子どもたちに必然性のある言語使用が可能とされている。

また、情報転換の原理もある。これは、実際のコミュニケーションにおいて、メッセージを受け取り、それに対応する際、伝達手段が変わるという原則である。

本研究では、これらの原則を小学校高学年に合致した内容にして外国語活動に適応させた。

2. 3. 学びの質を高めるための焦点化

外国語活動を子どもたちが行う中で、何に焦点を当てていくのかを子どもたち自身が意識することができればと考えた。これは、メタ認知とよばれるもので、

興味・関心	楽しみ 積極性 集中力	その場に適した態度で楽しんで活動する。 積極的に活動に参加する。 集中して活動に取り組む。
人間関係	協力 助け合い 認め合い	協力して活動に参加する。 助け合って活動に参加する。 認め合って活動に参加する。
表現力	笑顔 アイコンタクト ジェスチャー 声量 工夫	笑顔でコミュニケーションをとろうとする。 アイコンタクトを入れてコミュニケーションをとろうとする。 ジェスチャーを使ってコミュニケーションをとろうとする。 適切な声量でコミュニケーションをとろうとする。 工夫してコミュニケーションをとろうとする。
言葉	理解 聞き取り 発音 リズム 会話 気づき	英語の単語や表現の意味を理解しようとする。 英語を聞き取ろうとする。 英語を発音しようとする。 英語のリズムに慣れようとする。 英語を使ってコミュニケーションをとろうとする。 日本語や外国語の類似点や相違点に気づこうとする。
文化	理解	日本や外国の文化を理解しようとする。

表 1 外国語活動における焦点化項目
学習者中心の授業づくりにとって有効であると考える。

学習指導要領の目標では、外国語を通した「体験的な言語や文化の理解」「積極的なコミュニケーションをとろうとする態度の育成」「外国語の音声や基本的表現の慣れ親しみ」の3つのアプローチからコミュニケーション能力の素地を養うことと設定されている。

本実践では、この3つのアプローチを「興味・関心」「人間関係」「表現力」「言葉」「文化」の5つに再編し、さらに18の具体的目標を設定した（表1）。

なお、学校提案にある「学びに向かわせていく焦点化」として「興味・関心」「人間関係」「文化」が、「本時の中での学びの質の高まりを意識した焦点化」は、「表現力」「言葉」が対応している。

3. “I want to go to Italy.” の授業の考察

3. 1. 保護者ボランティアの活用

対象は6年生である。単元は英語ノート2のLesson6「行ってみたい国を紹介しよう I want to go to Italy.」を参考にしている。英語ノートでは、自分が行きたい国とその理由とを紹介することをコミュニケーション活動としている。本実践では、必然性を高めるためにコミュニケーション活動場面設定を工夫した。具体的には、保護者ボランティアの支援を得た。保護者ボランティアには旅行代理店の店員になってもらい、児童の行きたい国やその国を選んだ理由について聞いてから旅行パンフレットなどを使って旅行の提案を簡単な英語を使って行って頂いた（写真1, 2, 3, 4）。

学習指導要領の指導計画作成の配慮事項として、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど指導体制の充実を挙げている。保護者ボランティアは、まさしく地域の人々の協力と考えることができる。しかも、いきなり保護者ボランティアを活動に参加させるのではなく、以下の段階を踏んだ。

【保護者ボランティア説明会の開催】

保護者も小学校教員と同じく英語スキル習得型の授業を経験してきており外国語活動の正確な目標やイメージをもっていない。そのため、外国語活動の目標から正しい内容を伝達する必要がある。その対策として、事前説明会を開催して伝えた。また、その際、児童の英語スキルの状況を伝えたり、コミュニケーション活動実施上の質疑応答をきめ細かに行ったりした。

【外国語活動授業の参観】

外国語活動の目標やその指導方法、活動内容については保護者ボランティア説明会で行ったが、実際の授業を見て、イメージをもってもらうことも大切である。そのため、保護者ボランティアが参加する前に外国語活動の授業を参観してもらった。保護者で

あるため子ども理解は高いといえるが、外国語活動の指導内容や方法へのさらなる理解や子どもたちの様子を直接学ぶことが可能となった。

【コミュニケーション活動の環境づくり】

保護者ボランティアの負担を軽減するため、あらかじめ子どもたちの行きたい国とその理由を調べ、事前資料として配付した。また、旅行会社から子どもたちが行きたい国に関する旅行パンフレットも準備し事前に配付した。さらに、各旅行会社用のネームプレートも雛形を準備して配った。



(写真1,2,3,4) 旅行代理店役の保護者ボランティアと子どもたち

3. 2. 単元目標

- ・その場に適した態度で、進んでコミュニケーションをとろうとする。(興味関心)
- ・行きたい国を伝える英語の表現に慣れ親しむ。(言葉)
- ・行きたい国の言語や文化に興味をもつ。(興味関心・文化)
- ・英語を使って、工夫しながら行きたい国を伝える。(言葉・表現力・人間関係)

3. 3. 単元計画

外国語活動 【全 6 時間】	総合的な学習の時間 【全 6 時間】
第1次 行きたい所や国を伝える英語の表現に慣れ親しもう。(5時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞に出ている国を探そう。(2時間) ・自分の行きたい国を決めて調べよう。(2時間) ・自分の行きたい国にした理由を整理しよう。(2時間)
第2次 行きたい国を伝えよう。(1時間・本時)	

3. 4. 評価規準

- ・その場に適した態度で、進んでコミュニケーションをとろうとしているか。(興味関心)
- ・行きたい国を伝える英語の表現に慣れ親しもうとしているか。(言葉)
- ・行きたい国の言語や文化に興味をもとうとしているか。(興味関心・文化)
- ・英語を使って、工夫しながら行きたい国を伝えようとしているか。(言葉・表現力・人間関係)

3. 5. 本時の目標

- ・コミュニケーション活動で使う英語の表現に慣れ親しむ。(言葉)
- ・積極的に友だちの行きたい国を尋ねたり、自分の行きたい国を伝えたりしようとする。(興味関心・言葉・表現力・人間関係)
- ・積極的に保護者ボランティアに自分の行きたい国を伝えたり、相手の言葉を聞き取ろうとする。(興味関心・言葉・表現力・人間関係)

3. 6. 本時の展開

児童の活動	教師の活動・支援・留意点	評価の観点
【めあての確認】	・振り回りカードを見て、児童たちに今日のめあてを確認させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい雰囲気の中で、活動を始めることができたか。(興味関心) 観察
【ウォームアップ】	・行きたい国の理由も触れながらクイズを出題する。	
・世界の行きたい国クイズを考える。	・英語で答えるのが難関な児童は日本語で答えてもよいこととする。	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムに合わせて今日使う表現の発音に慣れ親しませる。 ・リズムのテンポに変化をもたせて行う。
【今日使う表現に慣れ親しむ】	・リズムに合わせて今日使う表現の発音に慣れ親しませる。	
・チャンツ Where do you want to go? I want to go to Italy.	・リズムのテンポに変化をもたせて行う。	
【コミュニケーション活動1】	・物指し、デモンストレーションをして活動の理解を深めさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「誰かが伝え合おうとしたいか、活動1・2共通 ・(言葉・表現力・人間関係) 観察・振り回りカード
・友だちの行きたい国をわかる。	・児童達の気持ちを褒める。	
【コミュニケーション活動1】	・保護者ボランティアが旅行会社員の役目を演じる。	
・自分の行きたい国を理由も触れながら伝える。	・児童が積極的に活動できるように声掛けや賞賛を行う。	
【振り返り】	・今日の活動の振り返りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の活動の振り返りをカードに記入させる。
・今日の活動の振り返りを行う。		

3. 7. 言語材料

Where do you want to go? I want to go to ~.
I want to meet ~. I like ~.
Korea, China, Thailand, America, the UK,
Canada, Spain, Italy, Belgium, France, Austria,
Greece, Australia

3. 8. 本時の子どもたちの振り返り

本時の最後に子どもたちが取り組んだ振り返り（子どもたちの自由記述）を考察すると、ほとんどの児童が保護者ボランティアとのコミュニケーション活動場面について振り返っていた。その内容は、今までこの活動のために慣れ親しんできた英語の表現を使って自分の行きたい国やその理由について、無事に伝えることができた満足感や達成感に触れている者が多かった。また、プラス面とは反対の面を記述する子どもたちもいた。これは、保護者ボランティアが子どもたちの行きたい国やその理由を聞いて、それに適切に呼応してくれていたことに関してであった。子どもたちは、慣れ親しんでいない英語の表現に対しては理解できなくて、保護者ボランティアが何を言っているのか分からなかったとういことであった。

4. 授業後の研究協議

本時は、平成23年度の附属小学校教育研究発表会で公開された授業である。授業後、和歌山市を中心に全国から集まった教員が参加して、「コミュニケーション能力の素地を育む外国語活動」というテーマで研究協議がもたれた。和歌山市立岡崎小学校の秦野稔子校長と和歌山大学教育学部尾上利美准教授に指導助言を頂いた。本研究において外部からの指導を得られる重要なものとなった。以下、研究協議会で得られた知見を述べる。

外国語活動は、英語のゲームや歌、チャンツなど楽しく慣れ親しむだけでは目標が達せられないと言うことは全参加者が納得できた。コミュニケーション能力の素地を育むためには、コミュニケーション活動にまでつなげなければならぬ。高学年ということを考慮すれば、伝え合うことに必然性があるコミュニケーション活動にすることがポイントである。その点では、本時では、保護者ボランティアを有効に活用することができていた。そのため、子どもたちのほとんどは、自分から進んで自分の行きたい国について伝え合うことができていた。

さらに、保護者ボランティア側の下準備や工夫がなされていた。子どもたちの行きたい国にした理由に対して、説明できるような準備がされていた。例えば、自由の女神を見てみたいのであれば、ニューヨークの地図と女神の画像をiPadで示しながら対応していた

り、オーロラが見たいのであれば、旅行用パンフレットで関連のページがすぐできるようにされていたりした。

次に、3で提案した焦点化であるが項目が多岐にわたり子どもたちが意識するには困難であるとの指摘があった。一つの授業に全ての項目について意識させるのではなく、重点化した項目のみ意識させればよいと考える。例えば、本時では単元の終末でもあり、コミュニケーション活動がメインなので、表現力に関しての項目から特に意識させたいものを選んで提示した方が良かったであろう。子どもたちの実態を指導者は的確に評価しながら、項目の取捨選択をしていかなければならない。

最後に、指導助言者からメタ認知を活用する学びのスタイルは、自律的な学習者を育てるためにも有効であることが示された。外国語教育学の研究上の理論を授業に適用することの重要性が明らかになった。

5. 成果と課題

外国語活動の歴史は、小学校教育の中で最も新しく実践数や研究数が他の教科領域に比べ、格段に少ないのが現状である。教育内容、指導方法、指導者の資質向上、教員養成、研修、予算など解決しなければならない課題は山積している。これらを同時に全て解決することは現実的ではない。着実に一つずつより良きものにするための授業実践や研究を増やしていくことが21世紀を生きる子どもたちの力へと結びつくのである。本研究により、外国語活動が大切にしているコミュニケーション能力の素地づくりという面で、必然性を高めたコミュニケーション活動の重要性が明らかになった。必然性を高める一つのアプローチとして、保護者ボランティアの活用が有効であることが判明した。

学習指導要領の指導計画の作成と内容の取り扱いのところで、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど指導体制を充実するように明記されている。本研究で取りあげた保護者ボランティアは、まさに地域人材であり、指導体制を充実させることができた事例である。

今後、さらなる地域人材の活用事例を増やしていくことが課題である。

参考文献

- 白畑知彦、富田祐一、村野井仁、若林茂則。(1999). 『英語教育用語辞典』. 大修館書店. 東京
辻伸幸。(2008). 「英語嫌いを生み出さないためには」. 河原俊昭編. 『小学生に英語を教えるとは?』. 株式会社めこん
辻伸幸。(2011). 「小学校外国語活動嫌いを誘発させる要因 — 学習者の質的データと量的データの分析を中心に —」. 『STEP BULLETIN』 vol. 23. 2011. 日本英語検定協会